

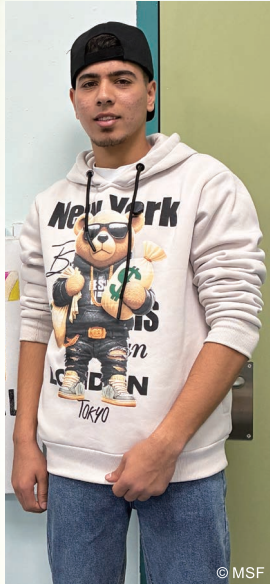
“未来”は取り戻せる

― 再建外科病院から ―

(ヨルダン)

紛争に巻き込まれて負傷した人びと。
それまで思い描いてきた“未来”が突然奪われた時、
夢や希望は諦めるしかないのでしょうか。
今号は患者さんの“未来”への前進を支える
MSFの活動をご紹介します。

取材〓国境なき医師団日本 事務局職員 野原麻美



オマールさん
(パレスチナ出身)

ミサイルで右腕を負傷した17歳のオマールさん。手をうまく動かせるようになるため、リハビリに毎日励んでいる。

「また字が書けるようになったのがうれしい」



ファラさん
(パレスチナ出身)

避難所だった学校が爆撃され、大けがで歩けなくなった11歳のファラさん。左脚を中心に再建外科手術を受けた。

「お医者さんになりたい」



ザラちゃん
(パレスチナ出身)

爆撃で大やけどを負った5歳のザラちゃん。一命を取り留め、再建外科病院で顔と腕に皮膚移植手術を受けた。

「学校で勉強したい!」



ラニアさん
(シリア出身)

爆撃で負傷し、左目の視力を失った10歳のラニアさん。顔の手術を受け、義眼を入れる手術を予定している。

「けがで人生を止めたくない!」



ヨルダンの再建外科病院の病床数は約120床で、6階まで外科、リハビリ、心のケアを中心としたさまざまな診療科を備えている。

再建外科病院の特徴とは？

- 紛争負傷者に特化した外科治療
- 社会復帰を見据えた包括的ケア
- 学齢期の子どもへの学習支援

患者さんのために。 “未来”を取り戻す MSFの再建外科病院

ヨルダンの再建外科病院は、紛争で負傷した人びとを専門に治療する国境なき医師団(MSF)の病院です。イラク戦争と社会の混乱により、2006年、自国で複雑な外科治療を受けられ

れない患者さんのために設立。現在はイラク、イエメン、シリア、パレスチナなどから患者さんを年間約600人受け入れ、整形・形成^{かくがんめん}・顎顔面外科を中心とした体の機能を取り戻すための治療を行っています。

治療とリハビリを重ねて

紛争でのつらい経験を経て入院した患者さんたちは、治療のあいだ、心のケアを受けながら過ごします。再

建手術や義肢の調整、リハビリを重ねる中で、少しずつできることを増やしていきます。また、子どもの患者さんは退院後に故郷の学校に復帰しやすいように学習支援も受けます。

「歩けるようになった」「ボタンが留められた」「スプーンが持てた」——毎日たくさんの希望が生まれています。“未来”を取り戻し、再び人生を歩み出せるよう、MSFは患者さんに寄り添い続けます。

治療を支える道具たち



保護マスク

やけどを負った皮膚の収縮を防ぐ保護マスク。院内の3Dプリンターでそれぞれの患者さんに合わせて作ります。表紙のザラちゃんも毎日着用しています。



作業療法の道具

リハビリで使う道具たち。時には患者さんの体の特徴に合わせて作ります。患者さんは、人の手を借りずに身の回りのことが自分できるように、繰り返し練習します。

未来へ向かって 1



けがで人生を止めたくない！ これからはどんどん良くなっていくのだから。



ラニアさん 10歳
(シリア・イドリブ県出身)

昨

年2月、おじの家に突然爆弾が落ちてきました。おじの結婚式のために親戚みんなで集まって、楽しく準備をしていた最中のことでした。私は爆弾が落ちた場所の近くにいたので、顔に大けがをしました。祖母は亡くなり、母とおばもけがをしました。

顔を包帯でぐるぐると巻かれ、救急車で病院に連れて行かれました。大きなサイレンが鳴り響く中、母が近くになくて、とても怖かったです。気を失ったのか、目がかすんでよく見えなくなったことまでしか覚えていません。

あの時は内戦後の混乱で、シリアの病院で治療を受けるのが難しかったため、父がいろいろと調べて、MSFのこの再建外科病院を見

つけてくれました。病院からは「すぐに来てください」とお返事があったそうです。

入院してから腕の皮膚を顔へ移植する手術や、左目と頬、あごの手術を受けました。次は左目に義



© MSF

眼を入れる手術を受けます。手術は怖くありません。これからはどんどん良くなっていくのですから。

やりたいことがいっぱい。 皆さんの優しさに感謝

病院では、塗り絵やサジェダ先生が手に描いてくれるヘナ・アート[※]、メイズ先生の授業が大好きです。でも早く治って母の待つシリアに戻りたい。友だちにも会いたいし、学校にも行きたい。私はけがで自分の人生を止めたくないのです。勉強を頑張っていい成績を取って、将来は歯医者さんになりたいです。

私は日本の支援者の皆さんにお礼を言いたいです。皆さんの優しさと人道援助の心のおかげで、この病院で治療を受けられています。

[※]ヘナという植物の葉をペースト状にして肌に繊細な模様を描き染める、伝統的なボディアート。

「病院の助けがあったからラニアが元気になりました」と父のザイドさんは語る。

未来へ向かって 2



字が書けることがこんなにうれしいなんて。 夢にまた一步、近づいた。



オマールさん 17歳
(パレスチナ・ガザ地区出身)

2

024年7月、自宅の庭にいた時のことです。何の前ぶれもなくミサイルが落ちてきました。私は右腕に深い傷を負い、一緒にいた父はその場で亡くなりました。

私はすぐにMSFが支援する病院に運ばれました。傷は深刻で、切断手術が必要になってもおかしくない状態でした。ですが、医師が

上腕の神経がかりうじてつながっていることを見つけてくれて、腕を残す手術をしてくれました。大きな傷はふさがったものの神経の回復が進まず、手はうまく動きませんでした。

以前のように手を使えるようになりたくて、ヨルダンの再建外科病院で治療を受けることをすすめられ、私はここに来ました。

“できること”が増え 夢に一步近づいた

現在は、作業療法を中心に、日

常生活で手を使えるようになるためのリハビリを続けています。握力をつけるトレーニング、ボタンを留めたり小さなものをつまんだりする練習など、細かい動きを一つずつ積み重ねています。そのおかげで助けを借りなくても、自分でできることが増えてきました。

特に、鉛筆を持って字が書けるようになった時は、本当にうれしかったです。それは、学校に戻るための大きな一歩だと感じたからです。私の夢は通訳になること。そのためにも、毎日1時間、字を書く練習をしています。

作業療法士のマルワンさんをはじめ、医師、看護師、心理士など全ての病院スタッフに感謝したいです。チーム一丸となって支えてくれたから、こんなに回復できました。

マルワン(右)の指導の下、握力をつけるトレーニングをするオマールさん。



© MSF



患者さんを支える病院のスタッフたち



“未来”を取り戻せるように、患者さんに寄り添う再建外科病院のスタッフたち。
役割の違う3人の活動と想いをご紹介します。

© MSF



学習支援で 子どもたちに希望を

メイズ(教師)

5歳から18歳までの患者さんに基礎科目を教える学習支援を行っています。まず、学習レベルに合ったクラスに分け、「字を書けるようになる」「太陽系を学ぶ」など、一人一人と学習のゴールを設定。治療やリハビリの合間に教室に来る約75人の子どもに教えています。

紛争で手足を失うような大けがをしたり、心に大きな傷を抱えたりして、入院する前から不登校になっている子どもも。そのため、再建外科病院の心のケアの専門家と協力しながら、学びを通して「できる」という気持ち育て、自信を取り戻すことを大切にしています。

また、手術やリハビリは痛みを伴うこともありますが、教室での交流によって入院生活が前向きなものになることを願っています。

© Mohammad Shatnawi/MSF



時には授業にゲームを取り入れながら、楽しく学べる工夫をしている。

ます。子どもたちは学び、自信をつけ、夢を持ちます。学び続けることで可能性が広がるのです。

© MSF



紛争がある国で 生まれ育ったからこそ 患者さんを助きたい

ラシード(外科医)

私はイラク人です。イラク戦争などにより、病院で治療を受けられない人びとを助けたくて、イラクの患者さんを治療する病院をヨルダンに建てる国境なき医師団(MSF)のプロジェクトに参加しました。2006年に再建外科病院が設立されて以降、アラブの春の影響などで中東地域の紛争が激化。次第に中東全域から患者さんを受け入れるようになりました。私は20年間でたくさんの患者さんの手術を行い、現在は外科チームをまとめる立場として働いています。

治療方針を決める際は「歩けるようになりたい」など、どんなことができるようになりたいかをそれぞれの患者さんに教えてもらうようにしています。

患者さんが元気になっていく様子を見ることが、何にも代えがたい喜びです。紛争に巻き込まれて、人生が止まってしまっ

はいけないと思うのです。

© Rehab Eldali/MSF



やけど治療を受ける 患者さんの心の 支えになれるように

サジェダ(心理士)

大学生の時に大やけどを負ったことから、やけどの患者さんを支えたいという強い想いがあります。ここでは心理ケアのカウンセリングに加え、ヘナ・アートを教える活動にも取り組んでいます。こうした新しい経験は、患者さんの心にプラスに作用するほか、上肢のリハビリにもなります。

編集後記

© MSF



の はらあさみ
野原麻美(国境なき医師団日本 事務局職員)

夕方、治療などを終えた子どもたちが「これが私の故郷」とスマホで動画を見せてくれました。街に落ちる爆弾やがれきの中で泣き叫ぶ子ども——。「こんな怖いの見たらだめよ」と言いかけ、はっとしました。これがこの子たちが生きてきた日常なのだと。

こんなに小さな体でどうやってこんなに大きなことを受け止められるのか。私には子どもたちを抱きしめることしかできませんでした。すると無邪気に笑って「また明日午後4時に」と言うのです。

取材最終日には「また会おうね」と約束しました。大きく成長した子どもたちにいつか会いに行きたいです。

手術で歩けるようになった表紙のファラさんと。

今号の感想を教えてください

スマートフォンから

今号の内容はいかがでしたか？
ぜひアンケートで皆さまの感想を聞かせてください。
締め切りは2026年7月31日(金)です。



2025年度版の活動報告書はウェブで！

2025年度のMSF日本の
財務状況・活動報告は6月中旬に
国境なき医師団ウェブサイトでご公開予定です。



ニュース
レター **ACT!** 2026年
6月号

発行元 特定非営利活動法人 国境なき医師団日本
〒162-0045 東京都新宿区馬場下町1-1 FORECAST早稲田FIRST3階

寄付・ご登録情報に関するお問い合わせ

TEL **0120-999-199** 通話料無料

平日9:00~18:00 土日祝日・年末年始休業

※ご住所など、ご登録の情報についての変更や、「毎月の寄付」の変更は上記までご連絡いただくか、マイページでお手続きください。

※2026年4月の情報を基にしています。
最新の情報は国境なき医師団ウェブサイトをご覧ください。



マイページは
こちらから

遺贈に関するご相談・お問い合わせ

TEL **03-5286-6430** 担当者直通

平日10:00~17:00 / 担当：荻野、小芝

国境なき医師団ウェブサイト www.msf.or.jp

